変化する布が地域に根付く理由

――東ネパールテラトゥムのダカ織小売店の観察から――

平成 27 年(編)入学
派遣先国：ネパール
高道　由子

キーワード：織物，布，伝統，もの，愛着，ネパール，リンブー族，支援，NGO

対象とする問題の概要

多くの伝統的な布が，観光客のお土産物や伝統産業の中で需要されることが多い中で，ネパールのダカ織については，お土産物としての認知度はそんなに高くなく，ネパール全域で人々に伝統的な使い方をされつつも，その枠を越えた多様な商品が人気を集めている。さらに，生産地として有名な東ネパールのテラトゥム郡では，自身も生産者である織り手が，客としてダカ織の商品を購入していた。

写真 1 ダカ織の帽子を被る男性

研究目的

テラトゥム郡において，ダカ織が根付く理由を明らかにしていく。特に自身も生産者である織り手が，客としてダカ織を購入するという事実が，地域にダカ織が根付くこととどのような関係があるのか，着目していきたい。布研究の対象の多くは，布の製作，使われ方，交換などの，個々範囲を対象とすることが多く，布の生産から商取引までを包括的に見た研究は少ないように思える。さらに多くの布研究の事例では，布の生産者と購入者の層は別の層になっているケースが多く，作り手と買い手が同一層であることが，どのような意味を持つのか，生産から購入までをカバーすることで，明らかにしていきたい。

調査方法としては，各アクターへのインタビュー調査に加えて，取引の拠点となっているダカ織の小売店において，参与観察ならびに来店客調査などの量的な調査を実施していきたい。

写真 2 テラトゥムの織り手

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークの目的は，ダカ織についての基本情報を得ること，調査地を決定することであった。まずダカ織の生産地として有名な二地域，パルパ郡とテラトゥム郡を訪れ，インタビュー調査ならびに工房と店の見学を実施した。インタビューの結果，両地域におけるダカ織の歴史的経緯は異なり，タンセンの方が織りの歴史が短いにも関わらず，伝統色に対するこだわりがある工房が目立った。しかし，いずれの地域でも新たなデザインが競争的に各工房で次々と生み出されている。また，商品の流通について，パルパではテラトゥムの，テラトゥムではパルパのダカ織がほとんどの店に置いてあった。タンセンでは，顧客ターゲットは地元の人だけでなく，ネパール国内旅行者のお土産物としての側面が強い一方で，テラトゥムでは旅行者はあまり見受けられず，布を制作する織り手が，布を店まで売りにくる売り手にもなり，時に買い手にもなっていた。

今後の展開・反省点

今後は人口に対してダカ織の店の数が多く，町にダカ織を身に着けている人の数が明らかに多かった，テラトゥム郡において調査を実施し，ダカ織がこの地域に根付く理由を，歴史，商売の構造，個々人の愛着，ステータシンボルの４つの観点から探っていきたい。反省点としては，今回ネパール国内の燃油不足により，テラトゥム郡に５日間しか入れず，しかもネパール最大の祭，ダサインの直前だったので，織りの様子がほとんど見られなかった上，工房オーナーも忙しく，インタビュー等のデータ収集がほとんどできなかった。次回はそうした情勢も考慮に入れ，事前にしっかりと準備をして調査に挑みたい。

写真 3 テラトゥムの U 店の様子